

## 土木の魅力を高めるために



\* 吉田 等

### 1. 土木に進みたがらない若者たち

若者の土木離れが深刻だ。土木の学生が金融やマスコミなど他分野に就職する例は珍しくない。専門紙の記事によれば、建設会社の中堅技術者が他分野へ転職するケースも増加しているようだ。土木分野全般に規模が縮小しているから土木技術者の数が少なくなるのは止むを得ないが、若者が土木の世界に進みたがらない現状は好ましくない。

土木が真に魅力ある分野なら、採用数が少なくても若者が殺到してくるはずだ。粒よりの精鋭が集まれば土木の未来は明るい。

土木を魅力あるものにするために何ができるかを考えてみたい。

### 2. 私が土木を選んだ理由

私が土木を選んだきっかけは、45年前小学生の頃に遡る。家の近くの小高い山に、ある日突然ブルドーザーがやってきた。見る見るうちに山を切り開き、やがて立派な自動車専用道路ができた。奈良と三重を結ぶ全長73kmの名阪国道はルート決定から用地買収、トンネルや橋の建設も含めて、調査から完成までわずか3年。俗に千日道路とも呼ばれる。

小学生の頃、山道をくねくね回るバスに乗ると必ずひどい乗り物酔いをした。新しい道路はその苦痛から私を解放してくれた。深い谷をまたぐ大きな橋梁を見上げては、その大きさに理屈抜きで感動した。土木はすごい。大人になったら土木の仕事をしようと心に決めた。

私の先輩の世代では、「黒部の太陽」の映画を見て土木に進んだ人が少なくない。高度経済成長期には、本四架橋や青函トンネル、新幹線や高速道路などビッグプロジェクトが目白押しだった。

ビッグプロジェクトが技術を革新し、若者に夢を与え続けた。日本の土木技術が世界をリードし、多くの若者が土木を目指した。

ビッグプロジェクトが数少なくなった今、このまま打つ手なしでは土木は衰退していただけだ。土木の魅力を高め、若者に興味を抱かせるには、私たち自らが変わらなければならない。

### 3. 子どもに人気のある大工さん

子どもが将来なりたい職業について、ベネッセ教育研究開発センターが調査を実施した<sup>1)</sup>。小学生男子では野球選手とサッカー選手が抜群の人気だ。スポーツ選手になることを夢見て、練習に励んでいる子どもが多い。つぎに、医者、研究者と並んで大工さんの人気が高いのが注目される。

大工さんの棟梁になり、施主の希望を聞きつつ図面を描き、じっくり吟味して材木を選び、自慢の大工道具を使って腕によりをかけて家をつくる。アイデアを形にできる創造的な仕事。同じものは2つとないオンリーワンの家。ものづくりの楽しさの原点がそこにはある。

マンガ家、調理師、建築家など、大工さんについて子どもに人気のある職業にも同じような共通点がある。小学生の目に魅力的な職業と映るためには、ものづくりの楽しさの要素が不可欠だ。

### 4. 土木構造物の匿名性

土木構造物は建築物とは違い、長い時間をかけて多くの人たちが協力しなければつくりえない。

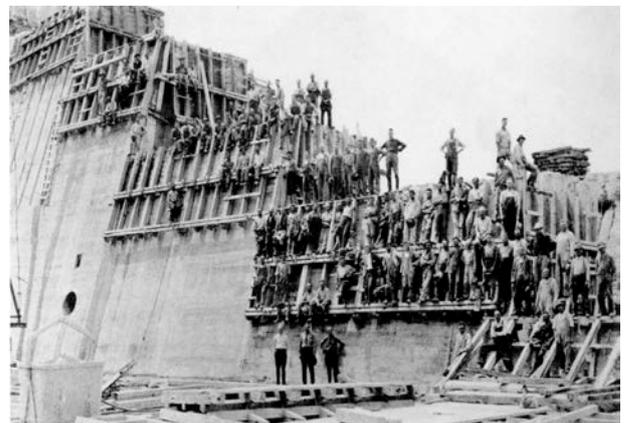


写真-1 工事中の集合写真<sup>2)</sup>

\*独立行政法人土木研究所 地質監

## 論 説

だから、土木の世界では建築の世界とは異なりチームワークを重視し、個人のスタンドプレーを排除してきた。つくった人の名前が出ない匿名性が尊重され、土木技術者もそれを潔しとしてきた。工事に携わった男たちがあのダムは俺がつくった、あの橋は俺が架けたと心の底では思っている、決して口には出さない。それが土木技術者の美学とされてきた。

しかし、匿名性を重視し過ぎたために土木構造物が個性をなくしてしまったのではないだろうか。

## 5. 没個性からの脱却を

高度経済成長期以降、欧米に追いつき追いこせを旗印に、土木構造物の整備が精力的に進められてきた。現在のこの豊かな暮らしは、先輩がつくってくれた土木構造物により支えられているのだけれど、そんなことに思いを寄せる人は少ない。土木技術者はまさに縁の下の力持ちだ。

当時は、限られた予算の中で、数多くの構造物を同時に建設しなければならなかったため、技術基準やマニュアル類が整備され、同じ機能と品質を持つ構造物が経済的、効率的に整備されてきた。

本来、土木構造物は工場で生産される工業製品とは異なり、建設現場ごとにつくられる特注品であるはずだ。建設サイトごとの地形や地質、周辺の自然環境、地域の風土、文化、それらの要素を全て加味して、そのサイトに最も適した構造物をつくるのが本来の姿だ。ところが、マニュアルや標準設計を多用するあまり、土木構造物が特注品であるという意識がいつの間にか消えてしまい、あたかも工場で大量生産できる工業製品であるかのような誤解が生じたのではないか。

マニュアルどおり、標準設計どおりの金太郎飴がつくられ、構造物が個性をなくし、土木技術者がものづくりの楽しさを感じなくなってしまった。

役者が心から楽しくなければ、観客に楽しさは伝わらない。土木技術者がものづくりの楽しさを感じないで、どうして子どもたちにその魅力を伝えることができるだろう。

優れた土木遺産と呼ばれる構造物は、個性的で魅力に溢れている。見る者に、それをつくった人たちのものづくりの楽しさが伝わってくる。

土木構造物の没個性からの脱却が土木の魅力を高める鍵ではないだろうか。



写真-2 土木遺産 通潤橋(熊本県)

## 6. 土木は未来の遺産づくり

土木のものづくりは、今や大量生産の時代から一品生産の時代へと大きく様変わりした。サイトごとの特注品である土木構造物を、時間をかけて丹念につくれる時代がやってきた。土木技術者がものづくりの楽しさを満喫できる時代が、やっと到来した。

景観法が施行され、地域の風土や文化に根ざし景観を生かした施設づくりを支援するための制度も整備されている。

これまで慣れ親しんだマニュアルや標準設計を手放し、オンリーワンの構造物をつくろう。地域の風土や文化に肌で触れ、日がな一日現場に座り込み、地形や地質、景観に最も適した構造物を構想する。四季の移ろう景色の中で、どんな構造物がそのサイトにふさわしいかをじっくりと考える。まずはそんな作業から始めよう。

土木構造物は建築物と比べて耐用年数がきわめて長い。土木は未来の遺産づくりだ。優れた未来の土木遺産をつくるんだという気概を持ってものづくりを楽しもう。そうすれば、きっと子どもたちが驚きの目で振り向くはずだ。

### 参考文献

- 1) ベネッセ教育研究開発センター:第1回子ども生活実態基本調査報告書、2005年8月
- 2) Arthur E. Morgan : The Miami Conservancy District、 McGraw Hill Company、1951